
最弱勇者と最強魔王

あるまー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱勇者と最強魔王

【Nコード】

N4825J

【作者名】

あるまー

【あらすじ】

高校2年生の萩原浩介は2009年最後の日に唐突に死んだ

彼の死が決定事項となった瞬間、本人さえも気がつかずに異世界へと飛ばされていた
ただ、分かっていた事は目の前に大変可愛い美少女がいる、ただそれだけだった

これは、最弱と最強が色んな場所を冒険して少しずつ強くなってい

序話：最弱と最強の出会い

2009年最後の日……

所謂大晦日は皆様、いかがお過ごししましたでしょうか。

俺、萩原 浩介《はぎわら こうすけ》は年越し蕎麦を食べて、寝ました……

実を言うと冗談です、俺は諸事情……まあ、高校生で早くも地元から離れて一人暮らしという事なんですが。

そんな事はどうでもよくて……改めて俺、萩原 浩介はこの日

死にました

理由？そんなものは何もなく、ただコンビニの帰りに頭の狂った謎の人物に後ろから刺された

そう 理由もなく だ。

だったら何故、俺が今こんな事を考えられてるかと言うと天国にいるからとかじゃなくて……いや、もしかしたら天国なのかもしれないが、俺は 生きている からだ。

意味が分からないのは百も承知で、実際俺も何がなんだかわからない状況だ。

ただ、俺が分かっている事は俺は森の中にいて、更に目の前に金髪、碧眼、ゴスロリドレスを着た少女がいて、そいつが興味深そうに俺を見ている。

これが今現在の状況。

俺が何も言えず、目の前の美少女をただ呆然と眺めていると、それまでじっ—とこちらを見ていた少女が口を開き、俺に向かって何の罪悪感も無さそうな顔で酷い事をサラツと言いのけた

「君、今までの勇者の中で一番弱いね！下手すると一般人以下かも……！」

この言葉に俺は酷く心を傷つけられ、余計に何も喋れなくなっていた

その言葉に含められていた【勇者】という謎の言葉にも気がつかずにただ、目の前の美少女を見つめ続けていた

序話・最弱と最強の出会い（後書き）

序話という事で結構短くなってしまいました

次回からはそれなりに長くなる予定です

鬼 少女 戦慄 血

目の前の少女は、無邪気な笑顔で再びこちらをじっーと見ている。

俺は、その笑顔をじっーと見つめ返していた……決して変な気持ちとかじゃなく、呆然と見つめ返してた。

するとこれまた唐突に少女が口を開いた。

「勇者さん！私と一緒にきてくれませんか！」

「ふえ？」

やばい、なんだ今の「ふえ？」ってマジ恥ずかしいんだが、今まで生きてきて「ふえ？」なんて言ったのは初めてだよ。

少女はひたすらにこっちを見つめてきていた、凄く真剣な顔で。

まあ、勇者がどうのこうのは置いて……あれ？置いていいんだろうか……じゃなくて！

ついてこいというなら右も左も分からない状況だ、お言葉に甘えさせてもらうか。

「ああ、いいよ」

「ほんと！？やったあ！」

何故が大はしゃぎ、別にはしゃぐ要素なんかないだろうに、だが可愛いからほっとこう。

「じゃあ、ついてきてー！」

少女はよほど嬉しいのかアラ。ちゃんもびつくりの速度で走り去っていった……あれ？走り去っちゃ駄目じゃないか！

「おい！ついていける訳ねえだろ！」

もう少女の姿が見えないけど駄目もとで叫んでみる、すると。

「ごめんなさい……嬉しくてつい……」

またもやア。レちゃんもビックリの速度で走ってきた、あれ？この子人間だよな？後、俺の方へとまっすぐきたのでぶつからないかとひやひやした。

てか、高校生が小さい子泣かせてるって結構……てか、ヤバイんじゃない……人いないと思うから大丈夫か……？

「あー……俺もすまんかった、叫んだりして悪かった、でも出来れば歩いてくれると助かるんだが」

「うん、ところで勇者さん！」

「ついでに、その勇者さんって言うのをやめてほしいかな、慣れないよ」

子供の遊びだろうがなんだろうが、勇者って呼ばれるのはむず痒いです。

遊びなら多少は我慢するかもしれないが、この少女の場合は本気で言ってるような気がしてならない。

「それだったら何て呼べばいいの？でも、私も『魔王様』って呼ばれるのは慣れてないからそんな感じなのかな……」

「ま、魔王様で……とりあえず、俺の名前は萩原 浩介だから浩介

って呼んでくれると嬉しいかな」

「変わった名前なんだね！勇者さん、じゃなくてコースケさんは！」

「変わった名前なの……？まあいいや、ところで君の事は何て呼べばいい？魔王様？」

冗談で言ってみると、少女はぷくーつと頬を膨らませた……これは誰が見ても可愛いって思うな、なんか小学生の体型でそんなことやられると自分がロリコンじゃないかと思ってしまうよ

「そう呼ぶなら私も勇者さんって呼ぶ……」

「あぁとごめん、冗談だよ」

「ミム……」

「ミムちゃん……でいいんだね？」

何かゲームで主人公の名前決めるときみたいな訊ね方だな、まあいいか

「うん」

「わかったよ、ミムちゃん……ところでミムちゃんは何故あんな場所……？」

ミムちゃんと呼んであげると途端に機嫌を直したようで、俺の質問に答えてくれた

「うーん……鬼ごっこ？」

「何で疑問系なんだよ……まあ、いいか」

元からだけど、俺の口癖「まあ、いいか」になってるな……まあ、いいか……あ……

「あ、鬼さんだ」

「え？どこどこ？」

「ほら、真正面だよ、ちょっとコースケさんは隠れてて？」

「……？りようかい」

隠れないといけない意味がわからないまま俺は木の陰に身を隠す

鬼の正体も実はわかってない

だが、ミムちゃんの指差した方向を見てみると鬼の姿が見えてきた
そう、【鬼】の姿が見えてきたのだ、彼女の何倍も大きい鬼が

「え……み、ミムちゃん！？」

俺は慌てて彼女に声を掛けるが、反応しない

鬼は自分の巨体を支えてるその足で、ミムちゃんを叩き潰そうとしていた

小さな女の子が目の前で死の危機に晒されているというのに俺の体は動かず、傍観していた

次の瞬間、何かは分からないがとてつもなく大きな音が聞こえ、砂煙が舞い上がりそして地震かと思うほど大きな揺れが襲い掛かってきた

俺は揺れのせいで尻餅をつきながらも、鬼がいた方向を見ていた

砂煙が晴れ、目の前の状況がわかるようになってくる

そこに立っていたのは、背をこちらに向けているミムちゃん

そのミムちゃんの目の前には何かとてつもなく重いものが降ってきて出来ただろう穴

穴の周りには夥しい量の【血】

俺はその光景に戦慄しながら、もう一度ミムちゃんを見る
ミムちゃんも俺の方をみる

彼女の顔には血が、彼女の着ている服にも血が……付着していた

「——っ！」

俺は悲鳴を堪えきれず、少しだけ声にしてしまった

ミムちゃんにも、それは聞こえていたが彼女は情けない俺を笑う訳
でもなく、軽蔑する訳でもなく

ただ、ずっと無表情だった

鬼 少女 戦慄 血（後書き）

そういえば、ミムちゃんの容姿を書き忘れていました・・・

いまさら文章中に組み込むのも難しいので、序話を修正して容姿を追加しておこうと思います
興味があれば、ご覧下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4825j/>

最弱勇者と最強魔王

2011年1月13日01時55分発行